



日野病院のマークを見て、 手塚治虫を思うということ



日野病院名誉病院長 井上幸次

昨年4月、日野病院に勤め始めた初日に辞令をいただいた折、会議室の正面に大きな日野病院のマークが掲げてあって、鳥の形と「ひの」という文字の両方をアレンジしたものなんだなあ、なかなか可愛いじゃないか、と思っていました。しかし、それが「おしどり」だということには思い至らず、この冬場におしどり観察小屋のリニューアルが話題になってはじめて、あれは「おしどり」なんだと気づいた次第です（日野にお住まいの方からは、もっと早く気付けよとお叱りを受けそうですが）。ただ、私は自分で勝手にこの鳥に「ひのとり」と名付けて納得していたので、それも気づきを遅らせた原因になっています。この勝手なネーミングに漢字をあてると当然のことながら、「日野鳥」なのですが、別の字をあてて、「火の鳥」としてもよいと思っていました。

「火の鳥」といえば、思い出されるのは、手塚治虫のあの名作です。自らを火に投じて復活することのできる不死鳥「火の鳥」は、その血を飲むと永遠の命を得ることができることから、過去から未来まで、さまざまな時代のさまざまな人達が、それを手に入れようといろいろな策を弄し、たくさんのドラマが生まれます。不死を望む人間の果てしない欲望を描くことで、かえって人の命の大切さを我々に語りかけてくれる漫画です。あまりに構想が壮大すぎて未完になってしまい、そこには答えがないにもかかわらず、というか答えがないからかもしれませんが、しっかりと心に刻まれる作品です。いろいろなエピソードから成っていますが、中でも「未来編」に描かれた未来の姿は、それが今や現実になりつつあるのではないかと思わせる洞察力に満ちていますし、「鳳凰編」は、とても深い内容で、並の映画や小説が遠く及ばぬ静謐なラストに心が洗われます。手塚治虫には医療を直接題材にした「ブラックジャック」や「きりひと讃歌」などもあり、それらはもちろんそれぞれ素晴らしいのですが、人の命をあずかる我々医療者にとって一番大事な命をそのままテーマにした「火の鳥」なのではないかと、よく思うことがあります。

実は私は手塚治虫の高校と大学のダブル後輩で、特に大阪の北野高校に在学していた時には、先輩だからということで、文化祭に手塚治虫が講演に来てくれるという贅沢なことがあって、直接その姿を拝んだことがあります。「それがどうした」と言われそうですが、実を言うと孝田院長も北野高校の出身なので、手塚治虫の後輩であり、小児科の竹茂先生も大阪大学医学部の出身なので、やっぱり手塚治虫の後輩なのです。手塚治虫の後輩が3人もいて、「ひのとり」をマークにしているのですから、これはもう何かの縁（えにし）があるといわざるをえません（別名「こじつけ」とも言いますが）。

もう一つ「えにし（こじつけ）」を言わせてもらえれば、手塚治虫が亡くなる前に一部構想だけが残されていた「大地編」というのがありますが、それを小説という形で再現した桜庭一樹という作家がおられます。彼女（一樹というペンネームですが、女性です）は実は鳥取県米子市の出身で、代表作の「赤朽葉家の伝説」は鳥取県で製鉄業がさかんな架空の村を舞台にしていますが、これって日野のことでは、と勝手に思っています。

更にダメ押しの「えにし（こじつけ）」を言わせてもらおうと、日野病院はロボット手術日本一の鳥取大学の重要な関連病院ですが、その鳥大が、導入初期から使用していた手術ロボットの「ダビンチ」に加えて、新たな国産の手術ロボットとして「hinotori」を昨年導入されました。

「日野鳥」をマークにかかげた日野病院が、「hinotori」を手にした鳥大と協力して、手塚治虫が「火の鳥」で描いた命の大切さを日々心に留めつつ、邁進していくことができれば、そこでこの一連の「こじつけ」が本当の「えにし」となるのではないかと夢想しています。